社会福祉法人
大分いのちの電話通信
相談電話 097-536-4343

第118号 2025年4月1日

■ 発行人　理事長　矢頭　道三　■ 編集人　編集委員会
■ 大分いのちの電話　事務局　☎ 097−537−2488
http://oitaind.sakura.ne.jp

大分城址公園

「受援力」

大分市社会福祉協議会
常務理事　増田　真由美

災害ボランティア研修で、「受援力」を知りました。被災し困っていて助けてもらいたいのに頼れない、自分のことは後にして他に困っている人がいるからと遠慮してしまう。幼い頃から自分のことは自分でするように、周りに迷惑をかけないようにと育ち、人に頼ることを学んでいなかったからだと思います。「受援力」は、困ったときに困っていると言える力、支援を受け入れようとする力です。

内閣府が出したボランティアを受け入れる立場の人たち向けのパンフレットには、「ボランティアをする人は困っている人を手助けしたい、人を支えたり、人の役に立ちたいと思っている人たちです。」とあります。支援を受け入れることをためらわず、手伝ってもらうことで、お互いにうれしい気持ちになるのだと思います。災害ボランティアを受け入れた地域の方は、感謝を言葉にし、他の地域が支援を必要とする状況になった時には支援活動に赴こうとするそうです。「受援力」の実践例です。

先日、本会の新採用職員研修で「受援力」を取り上げました。新たなことにぶつかり一人頑張ろうと悩む職員に、誰かに頼ることは弱いのではなく、相手を尊敬し信頼しているからで、頼られた人と良好な人間関係につながることを伝えました。

吉田穂波さんの著書の中に「子どもに引き継ぎたいと思っている『生き抜くためのノウハウ』のナンバーワンは、受援力です。」とありました。人に助けてもらう経験は、自分自身を人助け上手にするとも。

頼りあいができる関係を大切にしたいと思います。

（大分いのちの電話　評議員）

本通信誌は、共同募金配分金により発行しました。

令和6年度 第2回 大分県自殺対策講演会　　期日：令和7年2月24日

基調講演　演題「わかりあえないことから」

プロフィール　1905　「東京ノート」で第39回岸田國士戯曲賞受賞
2006　モンブラン国際文化賞受賞
2011　フランス文化通信省より芸術文化勲章シュヴァリエ受賞
2019　「日本文学盛衰史」で第22回鶴屋南北戯曲賞受賞
2019より兵庫県豊岡市に移住、江原河畔劇場を設立
豊岡演劇祭フェスティバル・ディレクターもつとめる

講師　芸術観光専門職大学学長 / 劇作家・演出家 / 劇団「青年団」主宰　**平田 オリザ** 氏

ワークショップで一番古くから使っているテキストの一つに、列車の中にAさんとBさん、そこにCさんが入ってきて、席を譲り合ったりしながら、「旅行ですか？」と声をかける、というものがあります。簡単そうに見えますが、日本の高校生や大学生にやってもらうと、意外と難しい。他者と接触が少ないからです。社会人の中にもこういうのが苦手な人が結構いることも分かってきました。日本の中高年の男性には、席の決まった宴会ならいいが、カクテルパーティーは苦手という方が結構います。

アメリカとかオーストラリアは話しかけられることが多い。アメリカでホテルに泊まって、エレベーターで他人と乗り合わせて「無言」ということはありません。日本人は、エレベーターに乗ると皆、上の方を見ています。エレベーターで話しかけるアメリカ人はコミュニケーション能力が高く、話しかけない日本人はコミュニケーション能力が低いダメな民族なのでしょうか。これは文化の違いです。アメリカという多民族国家は、狭い空間の中に色んな人が閉じ込められると、早く「自分が相手に敵意を持っていない」ことを声や形にして表さないとストレスや緊張感が高まってしまう。私たち日本人は、そういうことを声や形にして表すことは「野暮だ」という文化の中で育ってきました。緊張する局面が真逆になっているということが分かります。これは文化の違いですから、良し悪しではないし、まして優劣でもありません。

コミュニケーション能力とは

コミュニケーションの6、7割は、文化や習慣に根差したマナーなのです。日本の先生方は真面目なので、コミュニケーション教育を人格教育や道徳教育と混同してしまっていることがあります。コミュニケーションが苦手な子は、人格が劣る子って扱いになってしまう。無関係です。本当に恐れなきゃいけないのは、本当に私たちが謙虚にならないといけないのは、コミュニケーションの多様性の方です。アメリカでは、ホテルに泊まってエレベーターに乗ったら、“Hi”“Haw are you?”と言わないと失礼になる。でも、同じ英語を使っていても、イギリスのある階級に行ったら、話しかけたら失礼になるのです。こんなこと全部覚えることは出来ない。全部覚えるのは人工知能AIに任せて、私たちは検索さえできればよい。だとしたら、これからの若い世代が身につけなきゃいけないのは、「次に行く国は、どんなコミュニケーションを取るのだろう」という好奇心と、そして、自分の国の文化を押し付けない謙虚さの方です。これが本当の意味でのグローバルコミュニケーションスキルなんじゃないか、ということです。

ちょっと話を戻すと、アメリカは話しかけますが、イギリスは同じ英語を使っていても古い社会なので、住んでいる場所とか階級に

よって、全部英語のイントネーションが違っています。だから、おそらく相手を紹介してもらわないと、どんな英語で話しかけて良いのか決まらないんだと思います。話しかけるという行為一つとっても、お国柄とか民族性、国民性というものがあります。欧米の方たちは押しなべて、コミュニケーション能力が高くて、気さくで、フレンドリーでよく話しかけてくる、だからスティーブ・ジョブズみたいに皆プレゼンが上手くて、日本もグローバルだからあんな風にならないといけないと思っています。でもドイツ、オーストリアなど、ドイツ語圏は話しかけないんです。欧米と言っても、全然ひとくくりにはできません。アジア圏でも、タイや韓国は話かける。普遍的なコミュニケーションなんてそもそもないってことなのです。話しかければコミュニケーション能力が高いなんてわけではないということです。

日本の国語教育は伝統的に解釈を用います。作者の意図に合致するのが良い解釈とされてきました。でも、小説とか戯曲の解釈というのは、文化的な背景が違えば全く違う解釈が起こります。解釈の一つひとつは、その文化的背景と論理的な整合性が取れていれば、頭ごなしに否定してはいけない、というのが多文化共生型の教育の基本です。これは別に優劣ではないので、とりあえず違いとして認めて、「じゃあ、私たち今の日本社会はどうしていきましょう」と決めていくのが多文化共生型社会の基本です。海外で国際共同の仕事をしていると、本当に毎日、「何でそんな風に思うの？」「そんな風に解釈するの？」ということがしょっちゅう起こる。こういう事態に直面した時に、「何で分かんないんだよ」ってキレちゃったり、繰り返されると「どうせ、分かんないだろ」と諦めちゃうかもしれない。海外に出て行くことに向いている人は楽しんでいる人なんですね。大分県は立命館アジア太平洋大学もあるんで、もう普通に、特に別府はね、外国籍の方は多いです。アパートの隣の部屋の人と、いちいち「トランプどうですか？」とか話さないですよね。それよりもゴミの出し方について相談しないといけないんです。これからの70年間、毎日キレてたり、諦めてるのと、「そんな風に思うの、面白いね。じゃあ、今までとやり方変えてみようか」と考えるのと、どっちが良いかって話なんですよ。楽しめた方が良い。あれは国際社会で活躍する能力じゃない。君たちが後の70年を楽しく過ごすための能力です。そうやって考えれば英語の勉強もちょっと楽しくなるかもしれないってことなんです。

コンテクストのズレ

さて、話をもっと先に進めましょう。皆さんは何十年か生きてきて、話し言葉の個性というものを持っています。言葉から受けるイメージは、人それぞれ様々です。こいうものを、社会言語学なんかでは「コンテクスト」と言います。コンテクストは「文脈」と習いますが、ここではもうちょっと広い意味で、その人がどんなつもりでその言葉を使っているかの全体像だと思ってください。これが重なれば苦労しないのですが、そう簡単には重ならない。今問題になっているのは、「旅行ですか？」っていうセリフですね。中高生だと上手く言えない。上手く言えなくて当然なんです。簡単に見えるけど、その子のコンテクストの外側にあるセリフだということです。こういうセリフのことを、「コンテクストのズレ」と呼んでいます。コンテクストのズレは、落とし穴になりやすい。文化的な背景が違うものなら、もう少し気にかけると思うのですが、「旅行ですか？」は、「え、旅行ですかって、何？」とか、「旅行ですかってどう言えば良い？」って検索しないですよね。難しさに気づけない分、日常的な、身近な会話の方に落とし穴があるんじゃないかってことなんです。

演劇の世界でも、このコンテクストのズレが原因になっていることが多くあります。例えば、「シャベル」と「スコップ」。東京ではちっちゃい方がシャベルで、関西圏ではちっちゃい方がスコップです。「そこはシャベルで丁寧に、丁寧に」っていうセリフを書いたら、演じる俳優が関西出身だったので、「シャベルで丁寧には無理です」って言うんです。これ、知らなかったら、分からない。経験の浅い演出家ほど、俳優が上手く言えないと、「心理の掘り下げが弱いな」とか「台本をもっと深く読んでいないと」とか言います。ただ単にその言葉が

ズレているだけなのに。相手も自分と同じ意味で使っていると思っちゃうと、落とし穴になる。

これは異文化交流も同じです。世界を見ると、隣の国とはだいたい仲が悪い。トルコとギリシャ、マレーシアとシンガポール、ウクライナとロシアとかもそうですけれども、これは領土問題とかもありますが、一つは、文化が近すぎるってことがあると思います。例えば、私たち日本人は、他人の家に上がる時に、靴を脱いで揃えて、反転させて上がります。韓国の方の中にはこれが嫌な方もいらっしゃいます。特に反転させるのが。聞くと、「そんなに早く帰りたいのか」と。でも、これは靴を脱いで家に上がるという文化を共有しているから起こる摩擦です。共有しているから本来は仲良くできるはずなんだけど、ちょっとの差の方が、コミュニケーションギャップになりやすい。反転させるというのは、日本固有の文化で、美しいと思うのは日本人だけです。これが誰にとっても便利だったり、誰にとってもカッコよかったりすると、文化を超えて文明になります。でも、ほとんどの文化というのは民族固有のものなので、それは外の民族に強要できるほどの客観合理性はない。これを無理して強要しようとすると、「文化侵略」になってしまいます。

もう一つ厄介なのは、靴を揃える向きといった、こういう差異は、なかなか表に現れてきません。顕在化しません。それは、わざと言わないという日本の奥ゆかしさもあるけれど、それだけじゃない。こういう小さな差異は現れにくいのです。とにかく若い人たちにたくさん交流してもらって、「これ、同じに見えるけど、やっぱり違いなんだよね」と、違いを顕在化させることが大事です。でも、これも日本人は苦手なんですね。日本人はその場を収めたいんで、違いを強調されると角が立つ。異文化理解、他者理解というのは、まず違いを認め合うということの方が大事です。「いいね、いいね、それもいいね。人類皆兄妹」で済ませてしまうと後で困るんです。特に九州は近いし、どんどん交流してほしい、ただし、その時に仲良しだけじゃなくて、きちんと違いだけは認識するということが大事です。

社会的弱者のコンテクスト

今、このコンテクストを理解するコンピューターやロボットを生み出すことに各社がしのぎを削っています。なぜなら、これが最後の苦手な領域なんです。文脈、行間を読むというのが出来ない。例えば、小学校1年生くらいのお子さんが、嬉しそうに走って学校から帰ってきました。「お父さん、お母さん、僕今日宿題やっていかなかったんだけど、平田先生、全然怒んなかったんだよ」と言ったとします。さあ、何と答えますか。子どもがお母さん、お父さんに本当に伝えたかったことは何でしょう。これ、引っかけ、落とし穴があるんですね。落とし穴は、「嬉しそうに走って帰ってきた」です。本当に伝えたかったのは、「平田先生、大好き」とか、「平田先生のクラスで良かった」とかいう気持ちを伝えたかった。そう考えないと、嬉しそうに走って帰ってきた部分との整合性が取れなくなってしまうからです。基本的に子どものコンテクストを受け止めて、更に受け止めているよとシグナルとして返してあげるのが良いコミュニケーションと言われています。「ああ、平田先生、優しいね。でも、明日怒られるかもよ」とかって言ってあげるのが、教育学の世界では一番良いとされています。先に宿題の話をしちゃうと、子どもはキョトンとしちゃうんですね。そもそも宿題の話をするつもりは全くない。平田先生の話を親としたいから走ってまで帰ってきた。これが、繰り返されると、「この2人、自分の話を全然聞いてくれていないな」と思ってしまう。

医療現場で、患者さんが「胸が痛いんです」と言うと、ダメな看護師さんは「ああ大変、先生を呼んできます」とパニックに、普通の看護師さんは、「いつから痛いんですか？」「どう痛いんですか？」と訊く。でも、患者さん受けの良い、コミュニケーション能力が高い看護師さんは、「胸が痛いんですね」と、まずはオウム返しの応対。「今私はあなたに集中していますよ」とシグナルとして返してあげることによって、患者さんのパニックを抑える、こういう暗黙知を持っているんではないかと言われています。あるいは、ホスピスに入院してきた男性の奥さんが看護師さんに、「何でこの薬を使わなきゃいけないんですか？」と聞くわけで

す。ホスピスに集められている優秀な看護師さんだから懇切丁寧に優しく説明をする。奥さんはその場では納得するけれど、翌日になるとまた同じ質問をする。また一生懸命に答える。これが毎日繰り返される。ある日、ベテランの医師が回診に行った時に、やっぱり奥さんが聞いたんですね。その医師は一言も説明をせずに、「奥さん、つらいね」と言ったそうなんです。奥さんはその場では泣き崩れたんだけれども、もう二度とその質問はしなくなった。要するに、その奥さんが聞きたかったのは、その薬の効用なんかではなかった。「なぜ、自分の夫だけが癌に侵され、死んでいかなきゃいけないのか」と、誰かに問いかけたかった、誰かに訴えかけたかった。その問いへの答えを近代科学は持っていません。これは人間に残された最後のコミュニケーション能力です。教育や看護や介護、医療は、やっぱり人間がやらざるを得ない。ロボットやコンピューターは手助けはしてくれるけど、最終的には私たちがやらざるを得ない。なぜなら、患者さんや子どもをはじめとする社会的弱者は、コンテクストでしかしゃべれないからです。小さなお子さんがいらっしゃる方はお分かりになると思うんですけど、子どもは、全然関係ない事で気持ちを伝えてきますよね。大人から見たら、「平田先生が好き」って言えばいいじゃんと思うんだけど、それを宿題の話で伝えてくるんです。泣いている子が嬉しくて泣いているのか、悲しくて泣いているのか判定するコンピューターは、100年経っても無理だと思います。だって、人間だって分かんないんだから。でも、普段からその子に寄り添っている先生や看護師さんや親は分かるんです。要するに肌触りみたいな、そういう感覚が多分、人間の残された最後のコミュニケーションの領域です。まさに、このいのちの電話に関わっていらっしゃる方たちは、そういう領域に生きてらっしゃる。どうしてもコンピューターではまだ無理な領域です。それは、社会的弱者は、他のことで気持ちを伝えようとするからです。

よくグローバルリーダーシップと言いますけど、そのリーダーシップって、他人を引っ張っていく力とか、ディベートに強いとかそういうことなのでしょうが、もう一つリーダーに大事なことは、この社会的弱者のコンテクストを理解する能力が高いということなんです。論理的にしゃべる能力はもちろん必要です。論理的にしゃべる能力と同じくらい、論理的にしゃべらない人の気持ちを汲み取る能力が大事なのです。日本は借金の多い国で、この先まだまだ豊かな国であるために、どうにかして痛みを分かち合いながら、急坂を転げ落ちないように安定した社会を築いていくのが日本の課題ですよね。その時に、リーダーの側が、この社会的弱者のコンテクストを理解できなかったら、社会的分断がますます広がっていってしまいます。これからの日本のリーダーに必要なのは、この社会的弱者のコンテクストを理解することなのだと思います。

コミュニケーションデザイン

最後にどうやったらいいかってことです。もう1回ここに戻りましょう。AさんとBさんがいて、Cさんが入って来て、「旅行ですか？」と声をかける。皆さんが受けてきた学校教育だと、「旅行ですか？」と言うのはAさんだから、全部Aさんの努力、あるいはAさんの能力に関わってきます。でも、現実の社会はどうでしょう。話しかけるかどうかのもう一つの大事な要素、相手によるんです。こういうものを「関係」や「場」の問題として捉えていこうというのが、90年代以降に出てきた新しいコミュニケーション教育の考え方です。話しかけやすい環境になっているのか、話しかけやすい場づくりができているのか。医者の説明は上手いに越したことはないけど、もう一つ大事なのは、患者さんが　お医者さんに質問がしやすいような椅子の配置になっているかどうか、壁の色はどうか、天井の高さはどうか、受付から診察室までの道のりが患者さんを緊張させてないかとか、これ全てデザインの問題です。もっと広げてみると、街のどこにあるのか、交通アクセスは何が良いのか、これは交通行政とか街づくりのデザインの問題なんです。お医者さんに質問しにくいのは、患者さんがバスを乗り継いでやって来てヘトヘトになっているからかもしれない。原因と結果を一直線に結び付けない考え方を学問の世界

では、「複雑系」という風に言います。コミュニケーションの問題を「複雑系」の視点で捉えたのが、「コミュニケーションデザイン」という考え方です。いのちの電話の場合は電話だからなかなか難しいのですか、でも、どうすれば掛けてきた方がしゃべりやすいか、最悪の事態を招かないということが一番大事なわけですから、そうならないためにどうすれば良いかという工夫が、ただ単にコミュニケーションの問題を個人の能力の問題だけに帰すのではなく、デザインの問題として考えるということを、ちょっと頭の中に入れていてくれると良いかと思います。

シンパシーからエンパシーへ

「シンパシー」というのは、可哀そうな人がいた時に「ああ、可哀そうだな」と感じる。それも大事なんですけど、「エンパシー」というのは、異なる価値観、異なる文化的背景を持った人、「何でそんなことを言ったり、やったりしたんだろう」ということを理解しようとする態度や技術や能力のことを指します。例えば、4年前にトランプ大統領の支持者たちが国会議事堂に乱入しましたね。私たちはあの乱暴者を全く許せないけれど、トランプさんに投票した7千万人の悲しさや淋しさについては理解に努めないといけない。日本では共感と言うと、どうしても同意を含んでしまいがちです。同意する必要はない、でも理解をしようとする。それが、これからの多文化共生型社会では最も必要な能力ではないか。多少、我田引水になりますけど、このエンパシーを育てるのには、演劇、演劇教育が非常に有効だというのが、欧米の先端的な教育では、当たり前のことになっています。今日のAさんを演じること、「何でこの人話しかけてんだろ、私なら絶対に話しかけないのにな」とか、「何でこのBさん黙っていて、私ならここで一言言うのに」、この違和感がエンパシーの始まりです。私は違うけど、あなたがこうする理由は分かった。演じることによって分かった。この実感がエンパシーを生んでいきます。例えば、一番分かりやすい例は、いじめのロールプレイです。経験の浅い先生ほど、「ほら、いじめられた子の気持ちになってごらん」と言っちゃうんです。ちょっと考えれば分かる。いじめられた子の気持ちが分かればいじめない。でも、いじめっ子の側にも他の子から何かされて嫌な経験はあるはずなんです。「ほら、1週間前にA君から何かされて嫌そうにしていたの、さっきのBちゃんに似ているよ」と、ちょっと会話を変えれば開けてきます。「いや、1週間前のはAが悪い。さっきのは遊んでただけだ」。でも、こう言ってくれればチャンスなんです。「そうかな、先生から見ると似ているように見えたけど。じゃあ、どこがどう違ったのかな？」A君にとっての、Bちゃんにとっての、そして君にとってのいじめといじりと遊びは、どこがどう違うのか。まさにコンテクストはズレていたわけです。「君は遊びのつもりだったけど、Bちゃんはいじめと受け取ったんだよね。もしかしたら、1週間前にA君も遊びのつもりだったかもよ」。大人の社会もそうですよね。ハラスメントの初期段階はコンテクストのズレから始まります。ハラスメントの加害者は、口を揃えて「そんなつもりじゃなかった」と言います。で、別に演劇をやったからといって、いじめやハラスメントが無くなるとは思ってはいません。ただ、このコンテクストを擦り合わせるという概念を入れることによって、ハラスメントが起きにくい、いじめが起きにくい職場や教室は作れるんじゃないかという風に考えています。

今日のお話、直接お役に立つようなことがあったかどうか分かりません。多少参考にしていただければと思います。じゃあ、ありがとうございました。

（文責　編集委員長）

編集部より

最初に実践してくださったワークショップだけでなく、本論でも、フロアに問いを投げかけ、引き出された回答を元に話を展開するという双方向式のご講演をしてくださいました。そうした会場の雰囲気も含め、語られた講演内容のすべてを本誌に掲載したいところですが、紙数が限られているため割愛せざるを得ず、概要のみをまとめさせていただきました。先生の意を尽くしていないかもしれませんが、その点ご容赦下さい。

令和6年度 第2回 大分県自殺対策講演会　　期日：令和7年2月24日

2部　演題「音楽のおくりもの」

演者　大分県立芸術緑丘高等学校合唱部
（指揮：植木 千秋 氏、伴奏：山﨑 麻衣 氏）

前半
あの鐘を鳴らすのはあなた
今日はこのままおうちにいて
涙が乾く処方箋
夕焼け
桜の花びらのように

後半
心の瞳（坂本九氏の遺作）
明日があるさ
僕らはいきものだから（緑黄色社会）

アンコール
瑠璃色の地球

2部講演（大分県立緑ヶ丘高等学校合唱部）アンケートの一部を紹介いたします。

久しぶりに合唱を聴きました。
元気の出る、また楽しい曲、皆さん本当に素晴らしいです。
途中で涙が出てきました。
こんな素晴らしい音楽を聞かせて頂きありがとうございます。

清々しい歌声をありがとうございました。
大きなパワーをいただきました。

美しいハーモニーをありがとうございました。
目には見えないけれど、音楽が確かにそこにあることが感じられました。
身体の中に音が満ちて、空間に響く歌声に触れ、聴いていました。

ご支援ありがとうございました

ご援助ありがとうございます

2024年11月20日より2025年3月14日まで次の方々から合計1,802,237円のご支援をいただきました。賜りましたご厚志は有効に活用させていただきます。皆様のご厚志に感謝申し上げます。

（※はバザー寄付の方です）敬称略50音順

賛助会員　＜個人の部6件　39,000円＞

★10,000円 阿部正威 内野順雄 藤井涼一	★3,000円 衛藤純子 日隈由美子 藤島ミナ子

賛助会員　＜団体の部13件　378,309円＞

★83,309円 宗教法人カトリック大分司教区大分教会 ★50,000円 医療法人善慈会大分丘の上病院 株式会社ゴリラ 九州リース販売株式会社 ゴリラ大分株式会社	★20,000円 (有)上岡調剤薬局 大分教区大海組仏教婦人会連盟 ★10,000円 医療法人靖和会玄同内科医院 大分友の会 キリストの福音大分教会	光国寺和光仏教婦人会 ルーテル大分教会女性の集い ★5,000円 日本基督教団三重教会

寄付金　＜個人の部21件　323,000円＞※印バザー寄付

★100,000円 六田克美 ★60,000円 無名氏 ★50,000円 帆秋有里子 ★30,000円 河野信治	★10,000円 有馬圭子 大隈紘子 無名氏 ★9,000円 江口智子 ★5,000円 藤丸邦彦	松尾静子 ※吉原真理子 若菜洋樹 ★4,000円 加来廣子 ★3,000円 遠藤陽一 松原美保	無名氏 ※江﨑フサコ 大野進一 ★2,000円 無名氏 藤島ミナ子	★1,000円 佐藤元治

寄付金　＜団体の部8件　271,928円＞

★116,650円 讃美歌・典礼聖歌を歌う会 ★50,000円 日本キリスト教団大分教会	★15,000円 日本バプテスト連盟大分キリスト協会 扇田保育園 ★10,000円 森古鉄商店・大分聖公会 ★5,000円 双葉保育園
★50,278円 第2回大分県自殺対策講演会	

助成金　<2件　790,000円＞

★690,000円 大分県共同募金会	★100,000円 財団法人毎日新聞西部社会事業団

フリーダイヤル

- 毎日16:00～21:00
- 毎月10日8:00～11日8:00
- 9月10日8:00～17日8:00
  （自殺予防週間）
  連続168時間
- 3月10日8:00～17日8:00
  （自殺対策強化月間）
  連続168時間

日本いのちの電話連盟に所属する全国のいのちの電話で、協力し合って受けています。こちらもご利用ください。

大分いのちの電話日誌

12月　1日　「大分いのちの電話通信」第117号 発行
　　10日　フリーダイヤル相談「自殺予防いのちの電話」
　　11日　2024年度第2回スーパーバイザー会
　　21日　2024年度第5回全体研修会
　　演題:「精神疾患ある方からの相談電話への対応」
　　講師:大分丘の上病院
　　理事長・院長　帆秋善生
1月　10日　フリーダイヤル相談「自殺予防いのちの電話」
　　15日　第40期電話相談員認定式
2月　10日　フリーダイヤル相談「自殺予防いのちの電話」

大分いのちの電話は「苦情対応規程」を定めています。

2月　24日　令和6年度第2回大分県自殺対策講演会
　　基調講演
　　演題:「わかりあえないことから」
　　講師:芸術文化観光専門職大学学長、劇作家・演出家
　　平田オリザ氏
　　2部
　　演題:「音楽のおくりもの」
　　演者:大分県立芸術緑丘高等学校合唱部
　　（指揮者:植木千明氏）
3月10日～17日　自殺予防いのちの電話フリーダイヤル連続168時間
　　11日　令和6年度第3回理事会
　　27日　令和6年度第2回評議員会
4月　1日　「大分いのちの電話通信」第118号 発行

編集後記

今春は寒暖差が激しく、皆さま体調管理に苦慮されたのではないでしょうか。フライングで花を咲かせた大分城址公園の桜も蕾と戻っておりました。編集会議では、脱線話もありながら、人と話をする事で自分自身の免疫力を上げていたように思います。また、通信誌の編集にかかわることで"いのちの電話"の活動がたくさんの方々のご支援によって成り立っている事に気づき、感謝する時間になりました。

おかげさまで今回も118号をお届けします。是非ご一読ください。

〈編集委員〉